

アカデミア向け受託が好調

食品・医薬の臨床事業も

トランスジェニックグループのCRO事業会社「新薬リサーチセンター」

は、昨年度に黒字化を達成し、グループ総合力で商機拡大を窺う。動物を用いたインビボ試験の中核会社として、中小動物を扱う恵庭研究所、大動物を扱う神戸研究所を一元管理する体制をスタートさせた。今後、トランスジェニックグループが得意とする上流の探索領域との垂直統合型ビジネスを完結させ、製薬企業だけでなくアカデミアやバイオベンチャー向けの創薬支援を強化する。食品・医薬の臨床事業にも力を入れる方向で、動物のインビボ試験からヒトでの評価まで行える体制を武器に、新市場を切り拓く。

新薬リサーチセンター

トランスジェニックグループの売上は、前期比で2・3倍の約16億円と大幅成長を成し遂げた。遺伝子解析や病理検査事業を手がけるジェネティックラボと新薬リサーチセンターのグループ化が後押しした。CRO事業の中核となる新薬



永岡氏

岡茂樹氏は、「統合作業がありながらも、まずまずの売上が達成できた。グループ入り初年度としては合格点ではないかと手応えを示す。

今年度は、トランスジェニックグループ内の事業シナジーが期待でき、足元の受注も昨年以上に増加している。恵庭のラボ稼働率についても、「今年春から秋まで高稼働を続けている(永岡氏)という。今年4月

には、新薬リサーチセンターが大動物の安全性試験を行う神戸研究所を集約し、CRO事業を一元管理する事業統括会社として新たなスタートを切った。

トランスジェニックが

強い遺伝子改変マウス作製と高親和性抗体の作製から、ジェネティックラボの遺伝子解析・病理学的診断、そして新薬リサーチセンターの薬効薬理試験、安全性試験と非臨床試験を一通貫で実施できる体制が武器になりつつある。海外CROとも連携し、グループ機能を充実させてきている。

成長する抗体医薬では、トランスジェニックマウスを活用した試験を新薬リサーチセンターが受託し、分子標的薬のインビボ評価を行える流れを構築した結果、創薬支援事業では有望なシーズを持つアカデミア向けの

受託が好調だ。

非臨床だけでなく臨床部門の強化にも動いた。最重要ターゲットは食品臨床試験で、機能表示規制緩和を背景に、特定保健用食品以外でさらなる市場拡大が予想される。

既に北海道に拠点を置く会社として、道が機能性食品を審査する「北海道食品機能表示制度(ヘルシーDo)」のエビデンス取得のための臨床試験も実施している。動物での安全性評価に加え、臨床試験で血糖や脂質、腸内免疫などの機能性を評価できるノウハウを持ち、新たな市場を取り込む。

一方、医薬分野では、GE薬の生物学的同等性試験で受託拡大を狙う。今期はCRO事業で売上8億2000万円とさらなる成長を計画する。個別化医療の中心となる癌、炎症性疾患領域の創薬をターゲットで支援して

※二次利用実施許諾済

いくグループの事業ビジョンに呼応し、製薬企業に対して自由な発想で提案できるCROを旨とする。それに加え、機能性食品の開発支援でも特色を発揮し、「かゆいところ」に手が届く「CRO」として、依頼者ニーズに応えられる体制を強化していきたいと考えた。